

巻頭写真 秋吉台の火入れと植生

Vegetation and fire disturbance on Akiyoshi-dai Plateau, Yamaguchi, Japan

山口県の秋吉台は、日本最大規模のカルスト台地として知られ、特別天然記念物に指定されている。台上では毎年山焼きが行われ（写真1）、例年2月の第3日曜日実施の予定となっている。当日の早朝に風、天候、草の乾燥状態から実施の可否が判断される。可能であれば、事前に設けられた火道と呼ばれる防火帯から点火され、それに囲まれた全域が燃やされる。（庫本，1995）。行事としては、大正14年に陸軍主導で実施されたものが原型であるとされ、現在まで続いている。それ以前は、明治初期の入会地についての上申書である『山野慣行成跡取調上申書』に、秋吉台を利用する約半数の村で火入れが行われたとの報告がある。（藏本，2014）。

当地域の植生は、火による攪乱を受け、ススキ *Miscanthus sinensis* やネザサ *Pleioblastus chino* var. *viridis* を中心に、チガヤ *Imperata cylindrica* var. *koenigii* などのイネ科やハギ類 *Lespedeza* spp. を主とした半自然草地となっている（塩見・中村，1981）。樹木は、樹皮の厚いクヌギ *Quercus acutissima* などが点在する（写真2）。かつては、主にススキを資源として利用し、まとまった面積を持つ有益な採草地として維持されていた。昭和30年頃からは、燃料革命などで需要が低下し、現在では景観維持や、観光資源としての目的から火が入られる。

台上においてまとまった林が残る長者ヶ森は、タブノキ *Machilus thunbergii* を中心に、カゴノキ *Litsea coreana* などの



写真2 草地に生育するクヌギ。撮影：渡邊稜也。



写真1 秋吉台における山焼き。撮影：江口誠一。



写真 3 長者ヶ森のタブノキと周辺の草地。撮影：江口誠一。

常緑広葉樹により構成される（塩見・中村，1981）（写真 3）。交通の目印や，信仰の対象として祀られてきた歴史もあり，火が及ばないように管理されている。その存在は，享保 14（1729）年に萩藩へ提出された『地下上申絵図』の『大田村・長登村絵図』では確認できないが，天保 12（1841）年から編纂された『防長風土注進案美禰宰判』では大田村の項に位置と伝承が記され，風倒木の年輪が対応することからも，この 100 年あまりの間に樹林化したと考えられている（岡本・藤川，2013）。

これを含めた台上の植生変遷を明らかにした研究は極めて少なく，また，草地景観の成立時期についても課題が残る。このことから，筆者らは台上での調査を進めている。当台地は石灰岩地特有のドリーネと呼ばれる溶食窪地が多数存在し，底面に集積した堆積物は周囲の植生を反映していると考えられる。そのため，トレンチ掘削などで土壌観察をするともに（写真 4），試料を採取し各種の分析を行っている（参照：本号 31–36 pp.）。



写真 4 ドリーネ底のトレンチ断面。撮影：渡邊稜也。

引用文献

- 庫本 正，1995. 秋吉台の山焼き. 国定公園 No. 534: 32–35.
 藏本隆博，2014. 秋吉台入会地火入れと山焼き. 秋芳町地方文化研究 No. 50: 11–24.
 岡本 透・藤川将之，2013. 江戸時代の史料からみた秋吉台の土地利用と植生. 洞窟学雑誌 37: 1–20.
 塩見隆行・中村 久，1981. 秋吉台の現存植生図. 秋吉台科学博物館報告 No. 16: 71–93.

（渡邊稜也・江口誠一・藏本隆博 Takaya Watanabe, Sei-ichi Eguchi and Takahiro Kuramoto）